

THE NEWSLETTER OF NISHINOMIYA CITY MUSEUM

西宮市立郷土資料館ニュース 第22号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662 電話0798-33-1298



写真 新酒番船祝芝居絵

目次 CONTENTS

- 特別展「江戸時代の西宮と海」鰯を追う、酒を運ぶ。(西川卓志) … 2
- 最近の発掘調査から (合田茂伸) … 5
- 寄贈資料一覧 … 8

特別展「江戸時代の西宮と海」 鰯を追う、酒を運ぶ。

平成9年9月27日～11月23日

西川卓志（当館学芸員）

いま、西宮で海を意識しながら暮らすことは少なくなった。昭和40年代を過ぎる頃には、漁業で生計をたてておられた方がたも少なくなり、いまでは、岸辺近くを行き来する色とりどりのヨットや、沖行く大型船ばかりが海の主役である。海岸から見える海辺も整然と埋め立てられ、海浜公園と海上都市、工場ビル群に色分けされている。その沖がかつては「灘目」といわれ、穏やかな内海風景とはうらはらに、激しい潮の流れが潜む難所であることはあまり知られていない。この海に船を乗り出し、活躍した西宮の住人たちがいた。このたびの特別展では、御前の濱やその沖で暮らしのための船を操り、遠くは江戸や房総半島の諸村へ出向いて働いた人たちの活動を取り上げ、かつての西宮と海との関わりを考えてみることにしたい。

江戸時代の西宮町とそれをとりまく諸村において、海にまつわる歴史的な事柄はおおきく二つある。ひとつは、「関西漁民の房総進出」に関することであり、他は「灘酒の海上輸送」にちなむものである。今回の特別展「江戸時代の西宮と海」の副題、「鰯を追う、酒を運ぶ。」はこれらに由来する。「鰯」は庶民の食卓を賑わしただけにとどまらず、搾って灯火用の油に、その搾り粕や干鰯は肥料にと、当時の庶民生活をその根底で支えていた。とくに、近畿地方では先駆的に新田開発がはじまり、都市近郊の村むらでは、綿・菜種などの商品作物の栽培が活発化した。肥料には、かつての草木より、その速効性においてはるかに勝る干鰯が求められた。当初、最寄りの海から西海、南海へと漁場を広げ、しばらくして相模湾から房総半島にかけて手つかずの鰯漁場があるとわかると、新漁法を携えて乗り込んだ。そのなかに、西宮の漁民たちもいた。旅船として季節的に訪れる者、房総の地に移り住んで干鰯の製造販売までも行う者、それぞれは地元民と交渉をもちながら、鰯漁は定着していく。その後、元禄期の大津波や干鰯流通経路の確定、地元漁民の台頭により、関西漁民の進出は下火になるが、漁法は受け継がれ地元漁業として発展していく。

いまひとつの主役は、「樽廻船」である。樽廻船とは、おもに江戸時代に活躍した弁才船のひとつで、江戸と大坂・西宮間に酒荷運搬の専用船として就航した。はじめ、酒荷は他の諸荷物と同様に、江戸の十組問屋と大坂の江戸買次問屋の間で取引され、当初その運

搬は菱垣廻船が担当した。享保15年（1730）になると、積み荷が酒であるという特殊性から酒店組が十組問屋から脱退するという事態となった。酒は腐敗するため輸送に迅速性をもとめられること、海損処理では比較的被害を被ることが少ない酒荷物に、共同海損の原則のもとに不公平な負担を強いられる制度であること、さらに取引形態が異なった積み荷が混載されていることなどから、他の諸荷物と取扱いが異なる酒荷のみを独立して輸送することになったのが、その経緯である。ここに、酒積専用船「樽廻船」が仕建てられるようになる。樽廻船も、従来からの菱垣廻船と同様にいわゆる弁才船で、構造上けっして特異な和船ではない。積荷が限定されるため荷積み時間が短縮され、結果的に菱垣廻船に比べて迅速な運行が可能となった。江戸送りの酒荷が増えるにつれ樽廻船が優勢になり、さらに酒荷以外の荷物を積むという協約違反も犯しながら、すこしづつ菱垣廻船を凌駕していくことになる。この樽廻船を運行できる問屋は、大坂に8軒、西宮に6軒が許可されたのみで、西宮にも樽廻船問屋がいた。その運営形態にはいろいろな工夫がみられ、とくに一年間の酒価に影響する「新酒番船」レースには、廻船問屋の暮らしを垣間みることができ

このたびの特別展では、それぞれの所蔵者や保管者のみなさまがたいせつに保管されておられる史資料について、長期借用させていただくこととなった。そのご好意に深謝しながら、このたび展示することができるようになった史資料について、1、2紹介したい。

【新酒番船惣一番紙札】所蔵者：小寺吉治郎

小寺吉治郎家は江戸時代廻船問屋の「枡屋」の後裔で、現在も西宮市に在住される。小寺家では、この枡屋に関連する史料をたいせつに保存されてきた。ここに紹介させていただく2点の史料は、かつて『西宮町誌』（大正15年）に「新酒番船惣一番札」として写真が掲載されたことがある。いずれも紙本に墨字でおおきく「新酒惣一番」または「新酒入船惣一番」と書かれ、加えて「廻船の出帆入津の月日と時刻」と「樽廻船問屋名、船頭名」が記される。

1. 戌正月廿二日申上刻出帆

新酒入船惣一番枡屋権九郎

2. 三月三日戌上刻入津

新酒惣一番枡屋権十良（船図）

これらの資料は双方とも年紀を欠くが、干支・廻船問屋名および船頭名・出帆入津の日時を検討すると、前者が文久二年（1862）の資料で船主は御影の大和屋の利吉丸、後者が

文久元年（1861）のもので船は桝屋の手船、住吉丸であることが判明し、この資料から、桝屋が仕建て、その船頭「権九郎」「権十郎」が操った船が、新酒番船で一番となっていることがわかる。

新酒番船とは、江戸時代に上方（大坂・西宮）から江戸へ下されていた酒の運搬を競ったレースのことで、その年にできた新酒を江戸へ運び込む年中行事であった。そのはじめは元禄時代中ごろとされ、送り出す側も受け取る側もそれぞれでお祭騒ぎであったようである。他の資料もまじえながら、新酒番船の賑わいを展示により再現したい。

【善覚寺文書】所蔵者：善覚寺（千葉県安房郡天津小湊町天津所在）天津小湊町指定文化財
善覚寺は天津小湊町天津に所在する浄土真宗の寺院で、天津港を見おろす旧街道に沿って建つ。寺伝では、慶安元年（1648）に近江国高島郡で創建され、同四年に天津の地に移転してきたとされている。本寺には、関西漁民（紀州、摂州）のこの地方への進出を今に伝える重要な史料が伝蔵される。とくに、西宮市関連のものでは、正保2年（1645）からの過去帳、宗旨人別帳をはじめ、この旧天津村に旅してきた西宮漁民の実態を如実に物語る「先祖六衛門申伝事」や「道中日記扣」がある。房総地方各地に西宮の漁民の出漁を今に伝える資料は点在するが、本寺文書ほどにまとまったものはほかにない。とくに、「先祖六右衛門従申伝事」のなかには、四位六右衛門（初代）が房総半島（当初館山市船形）へ進出した経緯、その後、天津村へ移った時期やそのなりわい、鱸漁の導入とその隆盛の様子が、克明に描かれています。善覚寺のご協力をいただいて、この善覚寺文書を借用展示させていただくことになった。

展示期間中に実施する記念講演会と列品解説（予定）

- (1) 記念講演会 平成9年10月26日（日）14：00～16：00
「関西漁民の房総進出について」
小島孝夫（成城大学講師）
 - (2) 列品解説 平成9年11月8日（土）13：30～15：00
「展示品解説」
当館学芸員
- 会場はいずれも当館1階会議室

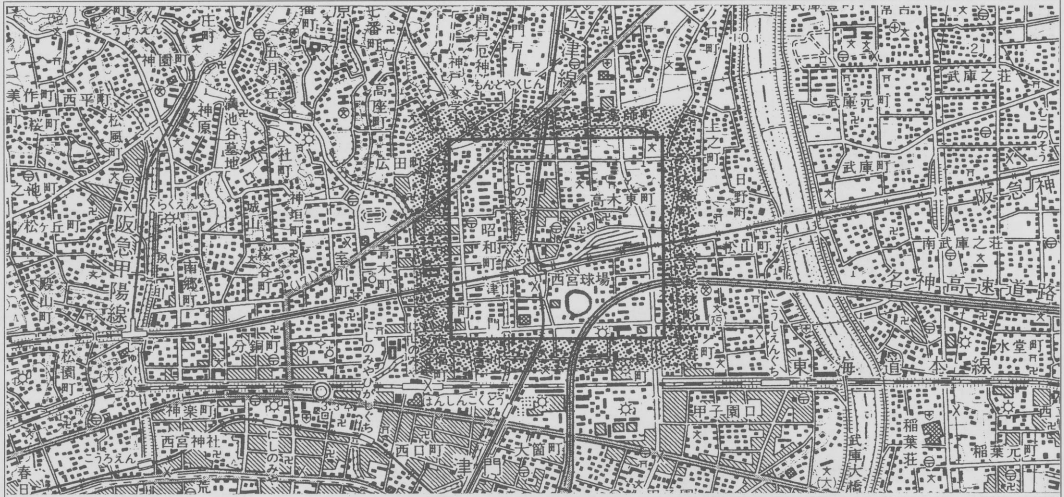
最近の発掘調査から

合田茂伸 (当館学芸員)

西宮市教育委員会では、1996年から1997年にかけて、市域南半の平野部を集中的に発掘調査する機会があった。市域南部は都市化がはやいため、これまで広域の発掘調査をおこなうことがあまりなく、遺跡の分布状況の把握が十分でなかった。兵庫県南部地震後、土地区画整理事業や市街地再開発事業の計画、実施にさきだち、数件の緊急発掘調査をおこなった。それらの調査では、顕著な遺構、遺物は検出されなかったが、市街地における約1 km四方の範囲の土層断面図を蓄積することができた。ここでその一部を報告する。

西宮市域は、通称、裏六甲地域と表六甲地域にまたがる。裏六甲地域は、六甲山地と小盆地および狭長な河谷平野からなる。表六甲地域は、標高931mをピークとする六甲山地、扇状地起源の段丘面、中小河川が形成する沖積平野からなる。これまで、遺跡はおもに、表六甲地域の段丘面上にしられており、沖積平野上の遺跡は、昭和初期以前の記録と、ふかい掘削をとまう工事中の発見によってあきらかになったものである。

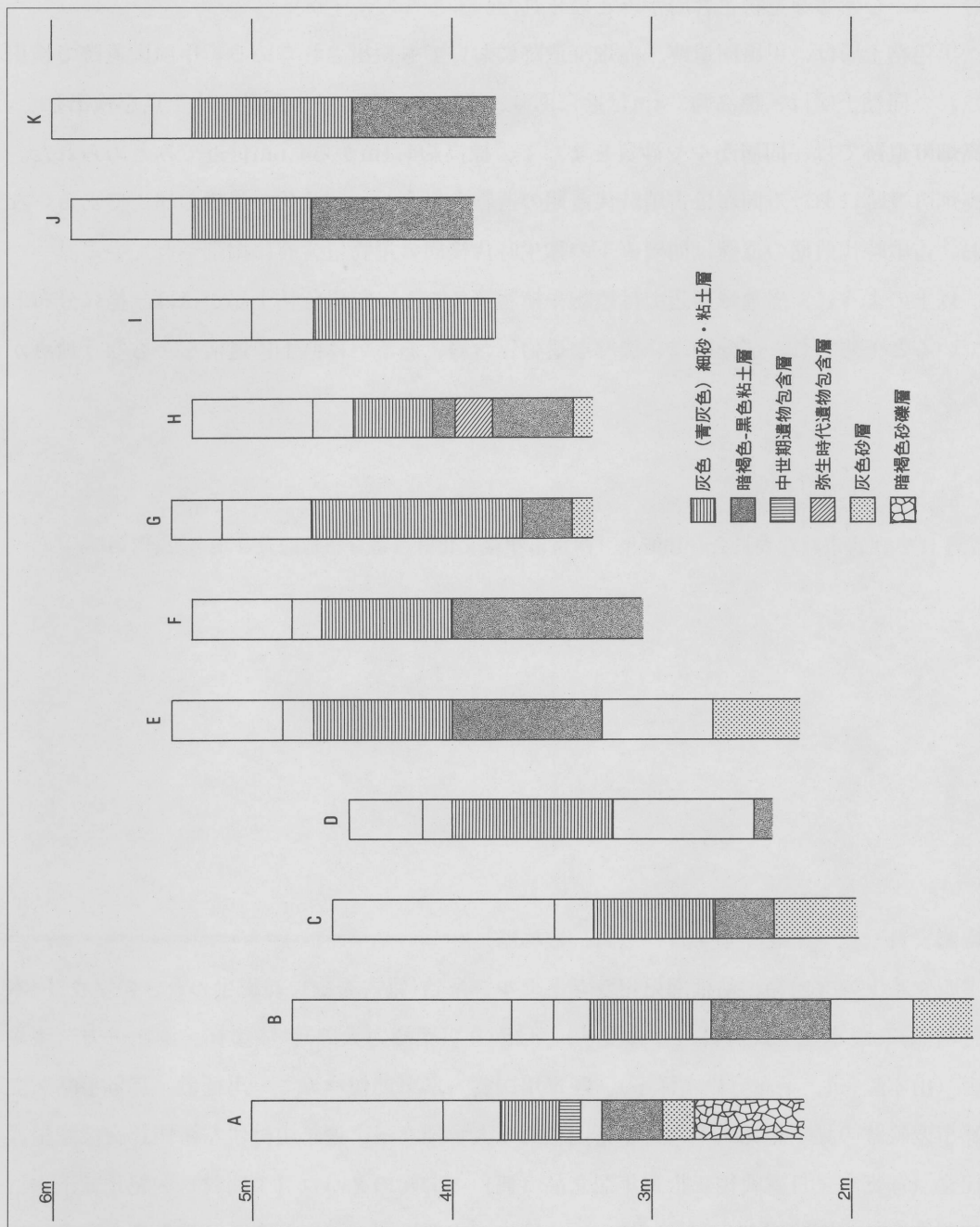
平野部のほぼ中央に位置する阪急電鉄西宮北口駅周辺には、同駅北西の甲風園遺跡および南東の高畑町遺跡がしられている⁽¹⁾。これら2遺跡にふくまれない区域において、約40箇所の確認調査を実施した。調査の方法は、小型重機および人力によって調査坑を掘削し、これを観察するものである。調査地は、標高約6 mから4.5mで、北にたかく南にひくい。土層は、1. 整地層や旧耕土層からなる表土層、2. おもに還元層となっている細砂層ないし粘土層、3. 暗褐色から黒色を呈する粘土層、4. 拳大以下の礫をふくむ砂礫層、を基本とする。調査地点によって各層のあつさの相違はみられるが、いずれの調査地点でも灰色から青灰色を呈する細砂層・粘土層中に黒色粘土層をはさむ点で共通している。この土層は発掘調査中より、鍵層として識別しやすく、調査地点相互の関係を把握するのに役だっていたものである。黒色粘土層が検出される標高は2.1mから4.5m、あつさは0.3mから1 mである。同粘土層は植物遺体をおおくふくみ、土質は非常に堅緻である。同粘土層下の砂層、砂礫層ではいちじるしい湧水のみられることがおおい。調査地区内では、遺物を検出することは少なかったが、調査地点Aでは、黒色粘土層の上層に、間層をへて希薄な中世期の遺物包含層がみつめられた。また、調査地点Hでは、黒色粘土層中に弥生土



第1図 調査地付近図 (1:50000地形図『大阪西北部』)



第2図 調査地点位置図 (1:10000地形図『西宮』)



第3図 土層柱状図

器をふくむ希薄な遺物包含層がみとめられた。

黒色粘土層は、甲風園遺跡、高畑町遺跡においても検出されている。甲風園遺跡で検出された同粘土層は、標高約3.4m付近にあり、あつさ0.12mで、瓦器小片1点を検出した。高畑町遺跡では、同層がやや砂質をまして、標高約4.1mから4.6m付近でみとめられた。高畑町遺跡における同層は古墳時代前期の遺物を包含し、同時代の遺構の埋土である。なお、古墳時代前期の遺構は同層直下の弥生時代後期の遺物包含層に掘削されている。

以上のように、当地域周辺では遺物や植物遺体をふくむ黒色粘土層がほぼ一様に分布していると予想され、部分的に、濃厚な遺物包含層、あるいは直下に遺構をとまなう地点がある。

註

- (1) 西宮市教育委員会 1997年『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』（第6版）

寄贈資料一覧（平成9年1月～6月、敬称略）

アルマイトの弁当箱・幼稚園児用ランドセル・糸巻（雑古秀雄）、初誕生のときのゾウリ（木村昌弘）、藤木九三氏著書（今林澄子）、はかり（栗崎力太郎）、漆塗杯・漆塗三方・漆塗台（山本隆三）、毛布（松本洋子）、陸軍用図囊・軍事郵便ハガキ・出征幟・従軍手帖・支那事変戦跡の葉・紀元二千六百年帝国在郷軍人会創立三十週年山村伊左衛門氏胸像贈呈式記念（写真）・日露戦後三拾週年記念品（皿）・御賜のタバコ（未開封）・紀元二千六百年記念大日本国防婦人会宣言（筒入）・国旗・中華民国の国旗・武庫郡佛教連合会皇軍感謝銃後後援報国托鉢のちらし（岡本紀士生）、カルタ（吉田達子）
ありがとうございました。

西宮市立郷土資料館ニュース第22号 1997年（平成9年）9月15日発行